

# ものがたり 前編

厚別中央・厚別南・もみじ台

## 「熊の沢公園」

—もみじ台地域

### 今

もみじ台地区は、昭和十四年から五十五年にかけて札幌市が造成した住宅団地です。先に建設されていたひばりが丘(春)と青葉町(夏の命名にならない)、秋をイメージして「もみじ台」と名付けられました。

地域の住民が利用する地区公園として「熊の沢公園」があります。約七万四千㎡(札幌ドームの一・四倍)もの面積の公園内には、芝生公園・

植栽・あずまや・トイレ・水飲み場などがあります。また、開発以前の姿を知ることができるところとして、約三万三千㎡もの自然林も残されています。自然林の敷力所には、次のような説明板があります。

この森は、シラカバ・ヤチダモ・ツリバナ・ヤマモミジ・マイゲツカエデ等多種の植物が繁る自然のままの森です。昭和四十四年札幌市がもみじ台住宅団地の用地として買収し、周辺の住宅地と調和したこの森林は、熊の沢公園として今後とも長く昔の姿のまま保存するものです。札幌市

### 昔

「熊の沢」の地名の由来は定かではありません。

「クマが出たから」とか「熊沢さんという人が住んでいたから」などといわれています。

この地域は明治十八年に福岡県から石松弥七と小ヶ口石太郎が野津幌川沿いに入植したのに始まります。当時はうつそうとした森林地帯で、昼でも暗く感じられるほどの巨木が立て込み、地面には笹竹やカヤなどの植物が生え、人の姿が見えなくなるほどに密生していました。開墾の手始めは、木を切つて炭を焼くことでした。昼は蚊やブヨに攻められ、夜は蚊の群れの襲撃を防ぐために、背中にヨモギを乾かした束を背負い、火を付けていぶしながら身を守りました。

明治二十年代の終わりから水田耕作が行われるようになり、仕事も畑作・稲作、また酪農へと変わり、のどかな農村地帯となっていました。

### 昔

上野幌、下野幌、小野幌、北広島市の西の里、江別市の野幌は、かつて「野津幌(のつほろ)」と呼ばれていました。

語源は、アイヌ語の「ヌプ・オル・オ・ペツ(野の中の川)」に由来しているといわれています。「野津幌」が「野幌(のつほろ)」と呼ばれたのは、この地域の一部分が昭和二十五年七月に札幌市と合併してからです。野津幌川の上手を「上野幌」と命名したといわれています。



宇納牧場(昭和2年ころ)

この地が大酪農地帯となったのは、大正十三年に宇都宮仙太郎が娘婿の出納陽一とともに宇納牧場を開いたことがきっかけでした。冷害や凶作に悩まされていた当時、農業安定のためにデンマークやアメリカの酪農を模範とした有畜農業が有効と考えられました。野津幌一帯は若き酪農家の研究の実験地であり、北海道で酪農経営を目指す者たちの研修の場ともなっていました。

## 所在地地図



今月の特集は、北海道の民話を研究している北星学園大学の阿部敏夫教授に執筆していただきました。

次回は6月号を予定し、厚別東、厚別西、青葉地区の今昔を取り上げます。

開墾の様子(明治中期)



もみじ台の水田風景(昭和45年ころ)



熊の沢公園

